幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業

成果報告書

（令和４年度～令和６年度）

機　関　名：　滋賀県幼児期教育センター

１．事業実施の目的

＜事業実施の目的＞

本県では、平成 27 年度から継続的に県独自の幼保小接続事業を実施しているものの、研究が終了すると継続しない、年度途中でカリキュラムを見直しにくいといった課題が見られ、取組が「点」に止まり「面」として広がりにくい現状があった。様々な施設類型から入学してくる小学校の実情を鑑み、施設類型の違いを越えた幼保小接続を推進することで、保育・教育の質的向上を図り、持続的・発展的な幼保小接続を目指した。

さらに、本事業と県独自の幼保小接続事業である「学びに向かう力推進事業」と兼ね、本研究の取組や成果を共有することで、研究成果を他の指定地域と波及できるようにした。（図１）令和６年度は、２年間指定の「学びに向かう力推進事業」の地域は５地域（本実施地域含む）であった。そのうちの３地域が継続地域、２地域が新規地域である。指定地域は、複数園もしくは保育所との幼保小接続を推奨することで施設類型の違いを越えた幼保小接続地域を拡充することを目指した。新規地域は継続地域の取組から幼保小接続の手掛かり等を得ながら、地域の状況に応じた研究を進めた。

	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度
1	A小学校区 (公立小・公立幼)		彦根市立城東小学校区 (国委託事業と兼ねる)			
2	B小学校区 (公立小・公立認こ)		F小学校区 (公立小・公立幼・公立保)		J小学校区 (公立小・公立認こ)	
3	C小学校区 (公立小・公立幼)		G小学校区 (公立小・公立認こ)		K小学校区 (公立小・公立幼)	
4		D小学校区 (公立小・公立幼)		H小学校区 (公立小・公立幼・私立保・私立保)		※R7～
5		E小学校区 (公立小・公立認こ)		I小学校区 (公立小・公立保)		※R7～

図１　「学びに向かう力推進事業」年度別指定校一覧

＜園・小学校の施設数等＞

	幼稚園			保育所		幼保連携型地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	1	89	17	55	149	51	87	1	218	0
園児・児童数	98	5,689	1,249	4,993	13,663	7,121	12,002	622	76,079	0

（令和６年５月１日現在）

２．事業実施に当たっての体制づくり

２－１．組織図・体制図

＜組織図・体制図＞（図２、図３）

本事業の実施地域は、彦根市の城東小学校区とし、公立幼稚園、公立保育所、私立保育所、私立幼保連携型認定こども園、公立小学校とし、３年間取組を行った。

１　実施園校の役割
- 「架け橋期のカリキュラム」に基づいた指導計画や保育の計画・実施。
- 県内の幼稚園・保育所・認定こども園、小学校教員を対象にした「公開研修会」の実施。

２　県教育委員会の役割
- 幼児教育と小学校教育の専門コーディネーターをそれぞれ１名ずつ配置。
- 実施園校に指導主事等を継続的に派遣し、該当の市町教育委員会・園所主管課と連携しながら研究の進捗状況を把握し、指導・支援。
- 「カリキュラム開発会議」の開催。
- 県内指定園校と連携を図るための「幼保小接続連絡協議会」を開催。
- 実施園校から報告された研究の成果等を取りまとめ、発信。

（架け橋期のカリキュラム開発会議）
公立幼稚園長１名、公立保育所長１名、私立保育所主任１名、私立認定こども園長１名、公立小学校長・教頭２名、コーディネーター２名、小学校加配教員１名、小学校校内研究主任１名、小学校１年生担任１名、園５歳児担任４名、教職大学院教授１名、県公立幼稚園・小学校担当３名、県保育所・認定こども園担当２名、彦根市小学校担当者２名、彦根市幼児課２名で構成した。架け橋期のカリキュラムの開発等について協議する会議体である。（図４）

図２　「幼保小の架け橋プログラム事業」体制図

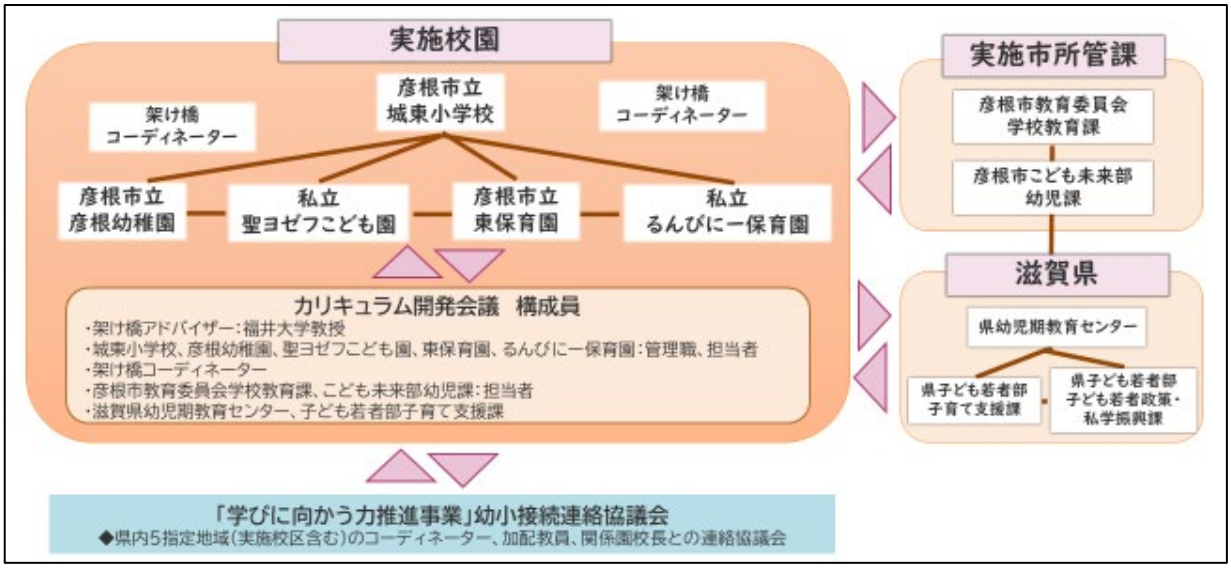


図３　「幼保小の架け橋プログラム事業」組織図

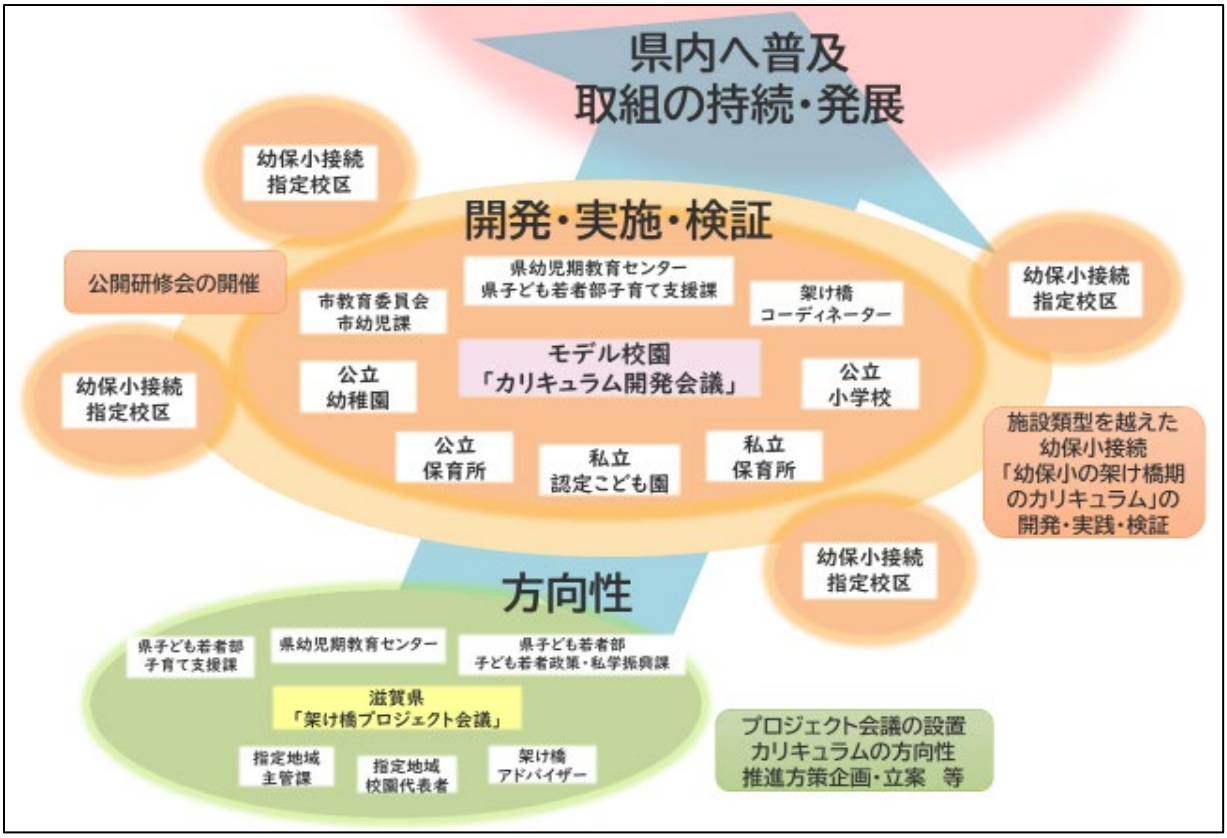


図４　「カリキュラム開発会議」体制図

＜体制づくりの進め方＞

本事業における実施主体は、滋賀県教育委員会であるが、所管する公立小学校と公立幼稚園のほか、公立保育所、私立保育所、私立幼保連携型認定こども園が協力施設となったため、滋賀県子ども若者部子育て支援課、子ども若者政策・私学振興課と教育委員会が連携しながら体制づくりを進めた。

また、県独自の幼保小接続事業の実施状況を鑑みて、彦根市教育委員会と彦根市こども未来部幼児課と協議し、校区内に施設類型が異なる幼児教育施設が複数ある城東小学校区を事業実施地域とした。

２－２．協力園・協力校

＜協力園・協力校の概要＞

（令和６年５月１日現在）

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
公立	小学校	彦根市立城東小学校	１年　32 名　２年　33 名 ３年　46 名　４年　36 名 ５年　49 名　６年　39 名 計 235 名	
公立	幼稚園	彦根市立彦根幼稚園	３歳児　9 名　４歳児 14 名 ５歳児　25 名 計　48 名	
公立	保育所	彦根市立東保育園	０満児　4 名　１歳児　11 名 ２歳児　15 名　３歳児　20 名 ４歳児　27 名　５歳児　26 名 計 103 名	
私立	幼保連携型 認定こども園	学校法人 滋賀カトリック学園 聖ヨゼフこども園	０歳児　3 名　１歳児　7 名 ２歳児　12 名　３歳児　29 名 ４歳児　35 名　５歳児　36 名 計 122 名	
私立	保育所	社会福祉法人愛育会 るんびに一保育園	０満児　5 名　１歳児　13 名 ２歳児　13 名　３歳児　16 名 ４歳児　22 名　５歳児　24 名 計　93 名	

＜協力園・協力校の指定プロセス＞

まず、事業実施の小学校を彦根市立城東小学校とし、次に、近隣の幼児教育施設である市立彦根幼稚園、市立東保育園、私立聖ヨゼフこども園、私立るんびに一保育園を指定した。幼児教育施設については、公私立および施設類型の違いを越えた幼保小接続を目指して４つの園を指定した。指定地域は、民間の幼児教育施設が多い実態があるが、本事業実施前は公立と私立の園同士は交流の機会がほとんどなかった。そこで、市幼児課が中心となり、城東小学校に近い私立の園に本事業説明を丁寧に行って依頼し、協力を得た。

＜自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組＞

年間３回、県教育委員会が「カリキュラム開発会議」を開催し、目指す子供像や重点とする幼児期の終わりまでに育ってほしい姿等について共通理解を図り、架け橋期のカリキュラム開発や見直しを行った。また、会議の前には、議題にしたい内容について、協力園校の代表者と協議し、充実した会議になるように準備を行った。

また、県教育委員会は、各園校への保育・授業参観、園内研修や校内研修等への参加や、実践記録や写真等の成果物を共有し、取組の伴走に努めた。

市内の幼保小接続を目的とした協議会において、県教育委員会担当者が講話を行い、県主催の「幼児教育教育課程および教育課題研究協議会」において、実施地域の代表者が実践発表を行うなど、県教育委員会と彦根市教育委員会、彦根市こども未来部幼児課が連携して取組を県内に発信した。

＜協力園と協力校同士の連携・協働の取組＞

各園校は、公開授業、公開保育等の相互参観の機会を積極的に設けた。参観後に互いに感想を言い合ったり、疑問に感じたことを分かち合ったりして、次第に交流を深めることができた。

課業日に授業がある小学校の教師にとっては、各園の保育を参観する機会を設定することが難しいため、夏季休業を利用して積極的に保育参観をした。

本事業実施前は、公立園と私立園の管理職、担任ともに、校区内の他の園を訪問したことがなく、各園がどのような保育をしているのか、保育の中でどのような子供たちの姿があるのか、全く知らない状況から始まった。そのため、実施頭初は不安が大きかったが、相互参観や子供の姿を語り合う機会を重ねる中で、顔が見える関係性ができ、協働して取り組む体制が構築された。

しかし、事業を実施する過程では、事業１年目に、それまで交流の機会が少なかった実施地区間での保育・授業参観の機会が増えると、それぞれの保育・教育内容の違いに気付くようになり、指摘することが多くなった時期があった。例えば、指導案の書き方１つにしても、公立幼稚園を基準とするような傾向になってしまい、それらを指摘したり、改善をするようなことに多くの時間を取られたりするようになってしまった。「教育要領の中の…ここは漢字で表記したほうがいいじゃないか…ここは平仮名の方がいいのではないか」ということが、話し合いの中に入ってきてしまい、それらを改善するということが重要になり、指摘された保育者や教師は、この事業に後ろ向きになってしまい、楽しんで進めていくということができなくなってしまう場面が出てきてしまった。各園校の保育・教育方針や環境が異なり、子供たちの生活の仕方等の違いがあるにも関わらず、その違いばかりを追って、１番大事な子供の姿がおざなりになってしまうことがあった。

その後実施した、１年目の第３回カリキュラム開発会議では、互いの保育・教育の違いに視点を置くのではなく、各園校の特色を生かした保育・教育をすることが大切なことであり、子供たちは各園で資質・能力を育くんでいること、そして、各園で育った子供たちを小学校が受け止めること、小学校はゼロからのスタートではなく、子供たちの成長が積み上がってきたところからのスタートであるということを確認し合った。そして、架け橋期にある子供たち、その周りにいる子供たちにも目を向け、日々の生活の中で、実施校区が重点とした子供たちの「自立心」「思考力の芽生え」が見えるところに着目するということが大事であることを共通理解することができた。

このような過程を経て、各園校の関係者は、子供に目が向けられるようになり、子供たちの主体性が見えた場面や、自立心の芽生えが見えた姿などを中心にしながら、教育・保育の振り返りをし、カリキュラムの作成をしていくことができるようになった。

２－３．協力団体等

＜協力団体等の概要＞

団体等名	団体等の活動概要

＜各協力団体等との連携＞

・特になし

２－４．架け橋期のコーディネーター等

＜架け橋期のコーディネーター等の概要＞

新規／継続	事業に関わった年度	役職名	経歴
新規	令和４年度	架け橋期のコーディネーター	元公立幼稚園長、幼稚園での勤務経験あり
新規	令和５～６年度	架け橋期のコーディネーター	元公立幼稚園長、幼稚園・保育所での勤務経験あり
新規	令和４～６年度	架け橋期のコーディネーター	公立小学校での勤務経験あり

＜架け橋期のコーディネーター等の役割等＞

彦根市教育委員会および幼児課からの推薦者を任命した。

実施園校に、幼児教育と小学校教育の専門コーディネーターをそれぞれ１名ずつ配置し、保育・授業に参画することによって、幼保小の連携・接続の促進を図った。その際、関わり方や役割を工夫し、園校の実態に即した柔軟な参画をした。

幼児教育施設では、担任保育士の補助として保育に関わり、管理職や保育者と適宜懇談の機会を設け、事業の進捗状況を確認したり、直面している課題について助言したりした。

小学校では、担任が進める授業の支援を行い、各園の取組や子供の様子等を積極的に伝達し、タイムリーな情報共有に努めた。各教科の学習において、幼児教育での経験が生かされるように、管理職や１年生担任と対話を行った。

また、訪問時に保育・授業の様子、子供の姿、保育者・教師の関わり方等について記録をとり、県と情報共有した。実施園校間の連絡調整が難しい場面や、実施園校が実践を進めていく中で出てきた疑問点や不安についても共有し、円滑な事業運営ができるように県教育委員会や市教育委員会および市幼児課が支援した。

小学校長からは、「園と小学校のつなぎ役になっている。互いの様子を教えてもらえる。子供に対して、園で保育士がされてきたことと同じように関わっていただき、スムーズに小学校と連携ができている。普段、授業に入って子供の姿を全体的に見ていただき、気になることは、助言してもらえてありがたい。」、幼児教育施設長からは、「園の悩み聞いてもらってる時もあり、非常に密に関わらせていただけた。小学校と園との架け橋をしてくださった。それぞれの園の保育の特質を生かしながら、寄り添ってくださったっていうこともすごくありがたかった。」等の声があった。

３．架け橋期のカリキュラム開発会議

３－１．会議委員等

＜会議委員一覧＞

会議の代表者氏名	井川　充子		他　（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
岸野　麻衣	福井大学教職大学院教授	有識者による指導助言	令和 4 年 4 月 1 日～ 令和 7 年 3 月 31 日
林　宏	市立城東小学校 管理職	・校区の方針の決定・共有 ・学校全体での共通理解	令和 4 年 4 月 1 日～(他 1 名) 令和 7 年 3 月 31 日
江龍　しをり	市立彦根幼稚園 管理職	・校区の方針の決定・共有 ・園全体での共通理解	令和 4 年 4 月 1 日～(他 1 名) 令和 7 年 3 月 31 日
横田　千佳子	私立聖ヨゼフこども園 管理職	・校区の方針の決定・共有 ・園全体での共通理解	令和 4 年 4 月 1 日～ 令和 7 年 3 月 31 日
荒尾　縁	市立東保育園 管理職	・校区の方針の決定・共有 ・園全体での共通理解	令和 4 年 4 月 1 日～(他 1 名) 令和 7 年 3 月 31 日
小川　良憲	私立るんびに一保育園 管理職	・校区の方針の決定・共有 ・園全体での共通理解	令和 4 年 4 月 1 日～(他 1 名) 令和 7 年 3 月 31 日
西村　嘉人	小学校 コーディネーター	・連携コーディネート ・カリキュラム作成	令和 4 年 4 月 1 日～ 令和 7 年 3 月 31 日
片岡　美味	幼稚園等 コーディネーター	・連携コーディネート ・カリキュラム作成	令和 4 年 4 月 1 日～(他 1 名) 令和 7 年 3 月 31 日
平中　理恵	市立城東小学校 教務主任	・カリキュラム作成 ・教材開発・授業実践	令和 4 年 4 月 1 日～ 令和 7 年 3 月 31 日
中川　可奈	市立城東小学校 １年生担任	・カリキュラム作成 ・教材開発・授業実践	令和 4 年 4 月 1 日～(他 2 名) 令和 7 年 3 月 31 日
木村　章子	市立城東小学校 加配教員	・カリキュラム作成 ・教材開発・授業実践	令和 4 年 4 月 1 日～ 令和 7 年 3 月 31 日
成宮　航平	市立彦根幼稚園 ５歳児担任等	・カリキュラム作成 ・教材開発・授業実践	令和 4 年 4 月 1 日～(他 2 名) 令和 7 年 3 月 31 日
三上　佳織	私立聖ヨゼフこども園 ５歳児担任等	・カリキュラム作成 ・教材開発・授業実践	令和 4 年 4 月 1 日～(他 1 名) 令和 7 年 3 月 31 日
藤野　遥香	市立東保育園 ５歳児担任等	・カリキュラム作成 ・教材開発・授業実践	令和 4 年 4 月 1 日～(他 2 名) 令和 7 年 3 月 31 日
山田　慈	私立るんびに一保育園 ５歳児担任等	・カリキュラム作成 ・教材開発・授業実践	令和 4 年 4 月 1 日～(他 2 名) 令和 7 年 3 月 31 日
川口　久美子	彦根市教育委員会 学校教育課	・指導助言 ・市内への発信・普及	令和 4 年 4 月 1 日～(他 2 名) 令和 7 年 3 月 31 日
長谷川　知子	彦根市子供こども未来部 幼児課	・指導助言 ・市内への発信・普及	令和 4 年 4 月 1 日～(他 2 名) 令和 7 年 3 月 31 日
山際　樹里	滋賀県子ども若者部 子育て支援課　主事	・指導助言、県内への普及	令和 4 年 4 月 1 日～(他 1 名) 令和 7 年 3 月 31 日
井川　充子	滋賀県教育委員会 幼小中教育課 幼児期教育センター	・会議コーディネート ・指導助言、県内への普及	令和 4 年 4 月 1 日～(他 2 名) 令和 7 年 3 月 31 日

＜会議委員の決定プロセス＞

　施設類型の違いを越えた幼保小接続を目指すため、幅広い視野で事業を進められるように、大学教授、実施園校の関係者、県・市の担当者で構成した。
　「カリキュラム開発会議」を新設して、年３回実施し、滋賀県が示した「架け橋期のカリキュラム枠」を基に、各地域の実態に応じたカリキュラムを開発した。

３－２．開催実績

＜開催実績＞

令和４年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
８月５日(金) ９：00 ～ 12：00	・事業概要説明 ・協議 架け橋期のカリキュラムにおける共通の視点について ・指導講話 「施設類型を越えた架け橋期のカリキュラム作成に向けて」	各園校の学園校経営管理計画や今年度の園校内研究等を踏まえて、「期待する子供の姿」を共有し、1 年目はカリキュラムを作成すること、２～３年は作成したものをもとに保育・教育の質の向上を目指すことが決定した。
11 月 15 日(火) 10：30 ～ 16：30	・小学校授業参観 ・協議 架け橋期のカリキュラムについて 本日の授業について ・指導助言	各園校が持参した実践事例をもとに、実施園校の重点にする「自立心」と「思考力の芽生え」が見られた子供の姿を共有し、「何をしていたか」から「どうやっていたか」という視点が大切であることを共通理解した。
２月 24 日(金) 14：45 ～ 16：45	・事業説明 研究１年目を振り返り、研究２年目に向けて ・協議 架け橋期のカリキュラムについて 次年度に向けて ・指導助言	当該年度作成した「架け橋期のカリキュラム」を見直し、今年度のまとめと、次年度に向けて、「期待する子供像」について共通理解した。

令和５年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
４月 24 日(月) 13：25 ～ 16：45	・授業参観　第１学年 ・説明 研究１年目の取組を踏まえ、研究２年目に向けて ・意見交流 架け橋期のカリキュラムをもとに ・協議　研究２年目の計画 ・指導助言	研究１年目の取組を振り返り、架け橋期のカリキュラムや期待する子供像について共通理解した。 架け橋期のカリキュラムについて、第２回カリキュラム開発会議にて検討することが決定した。
８月８日(火) 14：00 ～ 16：30	・１学期の実践交流 ・協議 ２学期の実践に向けて 「架け橋期のカリキュラム」共通シートの見直し	滋賀県版「学びのサイクルデザインシート」をもとに実践を持ち寄り、他園校の実践のよさについて語り合った。 「架け橋期のカリキュラム」

	・指導助言	の共通の視点について、文言をまとめてしまうことで具体が見えにくくなるという課題があったため、今後も引き続き検討することが決定した。
２月 21 日（水） 15:30 ～ 16：45	・説明 研究２年目を振り返り、研究３年目に向けて ・２学期の実践交流 ・協議 「架け橋期のカリキュラム」共通シートの見直し 研究３年目に向けて ・指導助言	当該年度の実践を踏まえ、「架け橋期のカリキュラム」共通シートの見直しを図った。 当該年度の取組の重点である保育・授業改善について振り返り、研究３年目に向けて、学園校全体、市全体、県全体の取組とするための方策を次年度研究推進することを決定した。

令和６年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
４月 22 日（月） 14:30 ～ 16：45	・説明 研究２年目の取組を踏まえ、研究３年目に向けて ・協議 架け橋期のカリキュラムをもとに共通理解 研究３年目および第１回公開研修会の計画 ・指導助言	これまでの取組を振り返り、モデル校区で育てたい子供像に込められた思いや、研究の変遷等を共有し、今年度の研究の方向性について共通理解を図った。
７月 22 日（月） 14:00 ～ 16：45	・協議 １学期の実践交流と架け橋期カリキュラムの見直し ２学期や今後の展開について ・指導助言	各園校が作成した「学びのサイクルデザインシート（ぐるぐるシート）」をもとに、1 学期の実践交流を行った後、次年度以降も持続的・発展的な取組にするための施策案を協議した。
２月３日(月) 14：00 ～ 16：30	・２学期の実践交流 ・協議 ３学期および次年度の実践に向けて 「架け橋期のカリキュラム」共通シートの見直し ・指導助言	各園校が作成した「学びのサイクルデザインシート（ぐるぐるシート）」をもとに、２学期の実践交流を行った後、次年度以降も持続的・発展的な取組にするための施策について協議し、共通理解した。

３－３．成果と課題

＜架け橋期のカリキュラムに関する議論＞

本県の架け橋期のカリキュラムは、県教育委員会が開発した滋賀県版「架け橋期カリキュラム」枠を活用し、校区の実態に応じて内容を検討した。

心を合わせて共に考える（協同）から、期待する子供像に迫るために力を合わせる（協働）へと協議が深まっていった。

【研究１年目（令和４年度）】

研究１年目は、カリキュラムの開発をした。カリキュラムを作成するためのテーマを話し合うことになり、校区の子供たちの強みと弱みはどんなことがあるか出し合った。そして、強みとして真面目に一生懸命取り組めることや、目的をもつて遊びに取り組めることが明らかになった。弱みとしては、自分の思いを言葉で伝えにくいこと、大人からの指示待ちで失敗を恐れがちな部分があるということが分かった。他にも様々な意見を付箋に書き出し、模造紙に貼って整理しながら、「期待する子供の姿」のテーマを決定した。また、10 の姿の中の、「自立心」「思考力の芽生え」を重点として、取組を推進することとした。（図５）

図５　研究１年目の取組

【研究２年目（令和５年度）】

研究２年目は、前年度作成したカリキュラムの見直しを図った。複数園との幼保小接続を進める小学校にとっても、教育課程のつながりが見やすくなるように作業を行った。具体的には、各園の教育課程を５領域でまとめて整理することで、園と小学校のつながりを意識できるようになった。（図６）

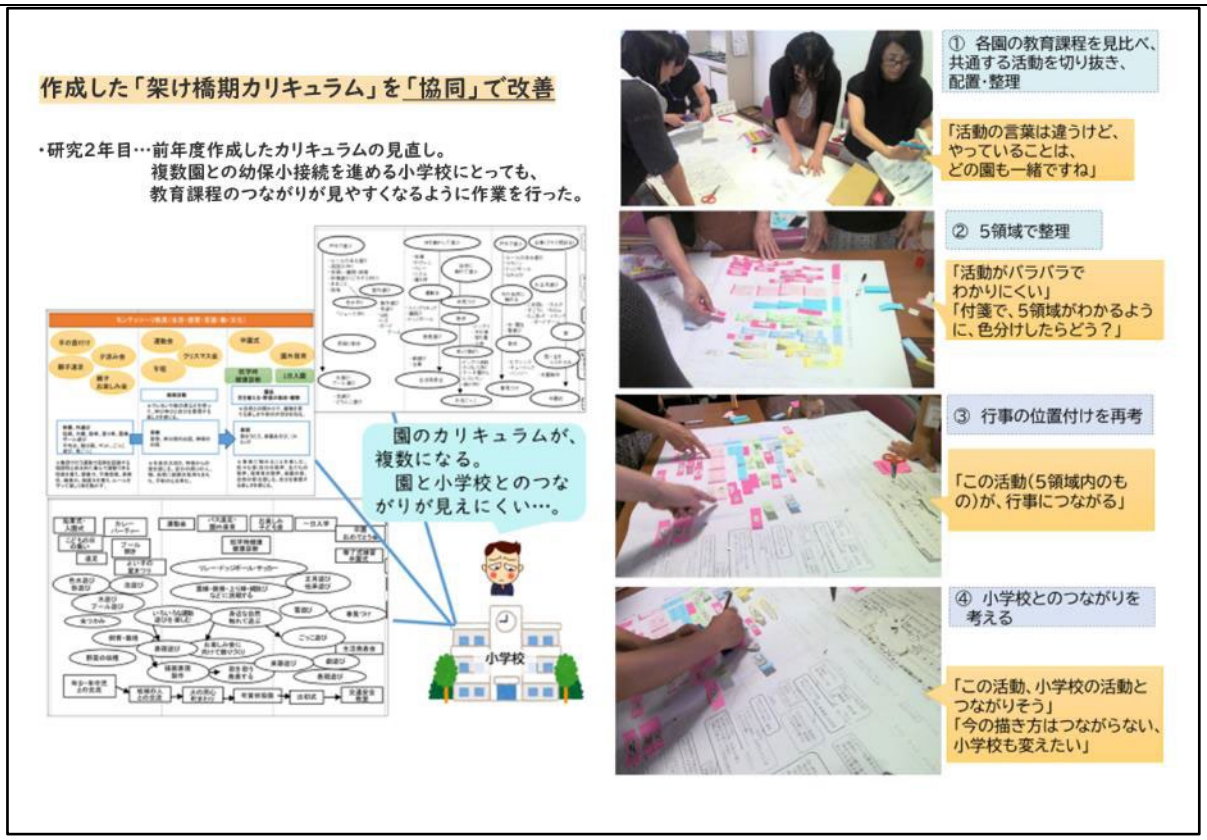


図６　研究２年目の取組

【研究３年目（令和６年度）】

研究３年目は、今後も持続可能な取組とするため、架け橋期のカリキュラムが誰にとっても見やすく使いやすいものにするための見直しを行った。資質・能力を具体的に表し、イメージしやすく、共通認識できるようにするため、カリキュラム枠の「主な教育課程・予想される活動」に子供の気付きや考えを加筆し、整理した。（図７、８）

図７　研究３年目の取組

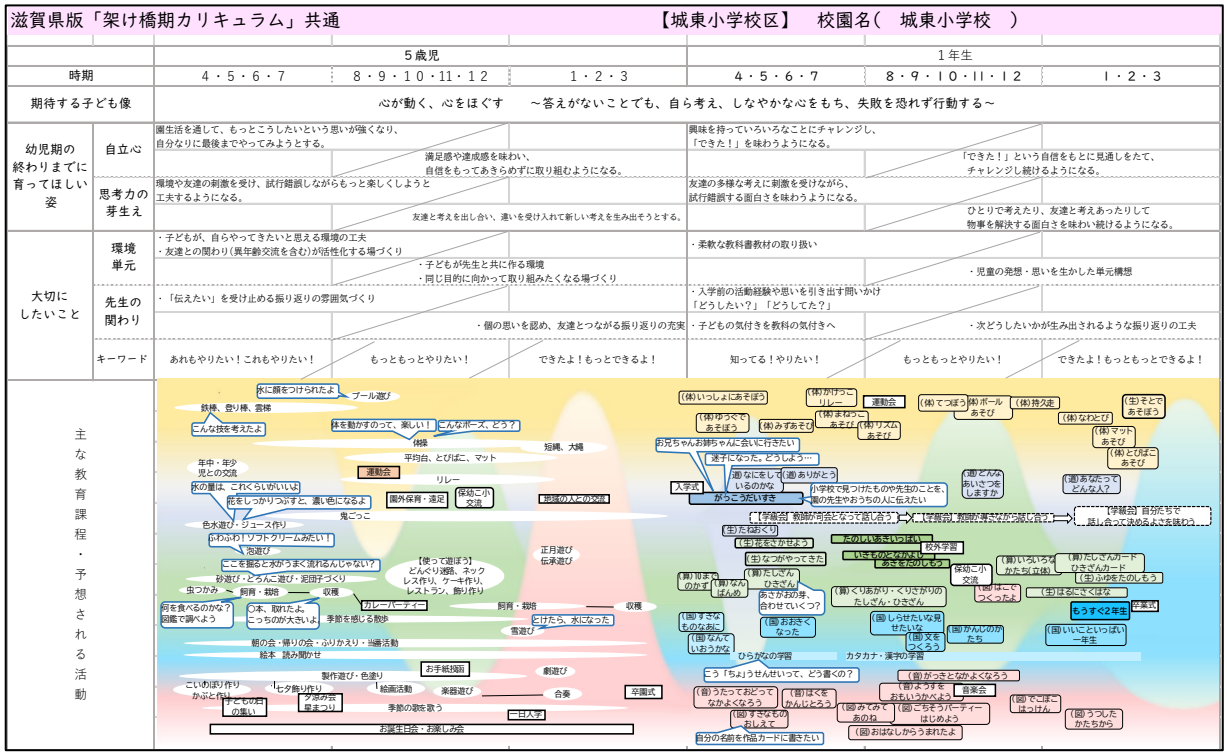


図８　研究３年目作成「架け橋期のカリキュラム」

＜会議設置による成果と課題＞

県教育委員会が主催で、年間３回「カリキュラム開発会議」を開催し、目指す子供像や重点とする幼児期の終わりまでに育ってほしい姿等について共通理解を図り、架け橋期のカリキュラム開発や見直しを定期的に行った。

定期的な会議の開催により、参加者同士の交流が促進され、各園校の取組が充実した。幼稚園、認定こども園、保育所、小学校の教職員が互いに意見を交わし、情報共有を行った結果、参加者間の信頼関係が深まった。特に、グループ協議やワークショップを通じて、実践的なアイデアや事例が共有され、モデル校区間の連携が強化された。このような取組により、子供たちの成長を支えるための一貫した教育体制を築くことができた。

施設類型の異なる実施園校のため、会議に出席しやすい時間帯や出席できる人員に限りがあったが、事業１年目は共通理解したい内容が多く、会議の時間が大幅に超過してしまい、負担が大きくなってしまった部分があった。そのため、２年目以降は会議の内容を精査し、各園校でコーディネーターを中心として事前・事後にできることは省き、タイムスケジュール案を立て、予定通りの時間と内容で終了できるようにした。

４．架け橋期のカリキュラム

４－１．開発プロセス

　実施地域が主体となって架け橋期のカリキュラムの開発を進めた。
事業１年目に各園校で作成したものは、園校独自の活動や行事が入ったものだったが、共通シートとして活用するには、つながりを考えることが難しいという課題が残った。（図９）

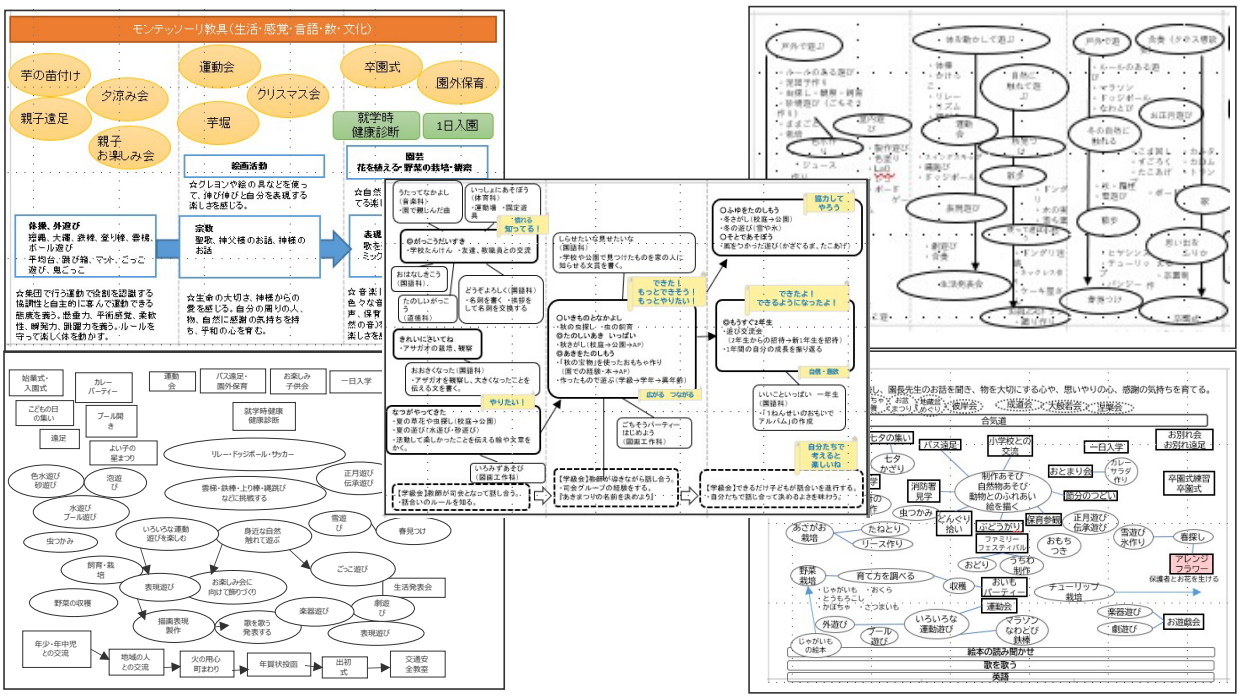


図９　研究１年目作成の各園校作成の「架け橋期のカリキュラム（共通シート）」

事業２年目には、各園で作成していた共通シートの内容を５領域にまとめて整理し、小学校は生活科や特別活動を中心に置き、園からのつながりや教科等を横断した合科的・関連的な学びを表そうと整理した。しかし、園の一つ一つの活動が各領域の中におさめられ、ほかの領域と関連していることが分かりにくいことや、小学校は、園の活動とのつながりが見えにくいといった課題が出てきた。（図 10）

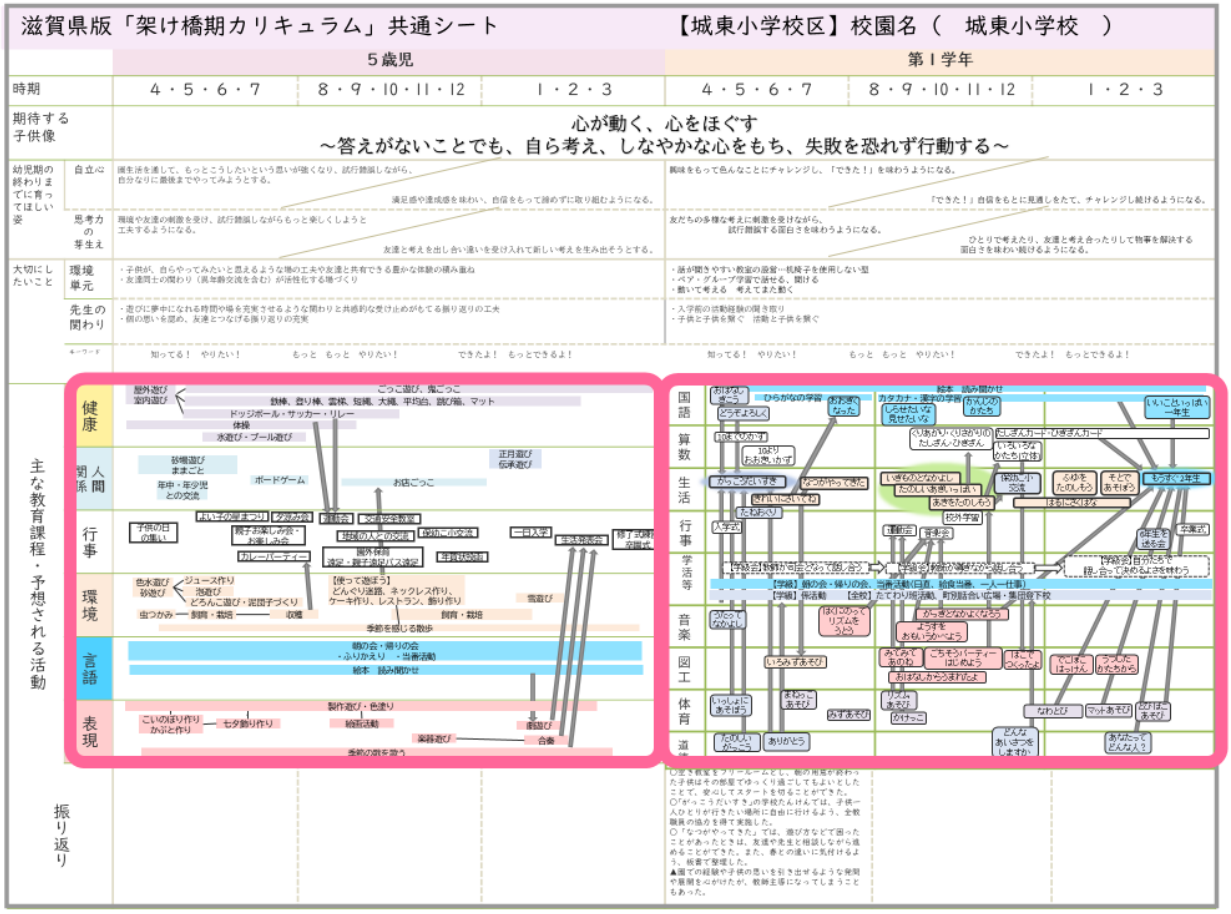


図 10　研究２年目作成の「架け橋期のカリキュラム（共通シート）」

そこで、幼児教育の５領域の視点で「主な教育課程・予想される活動」をとらえ直し、５色の図に整理した。各時期に核となる活動を置き、色のふくらみで領域を横断していることやそのふくらみの中に関連する活動や単元等を置くことで、総合的な遊びや合科的・関連的な学びを展開していることを表した。（図 11）

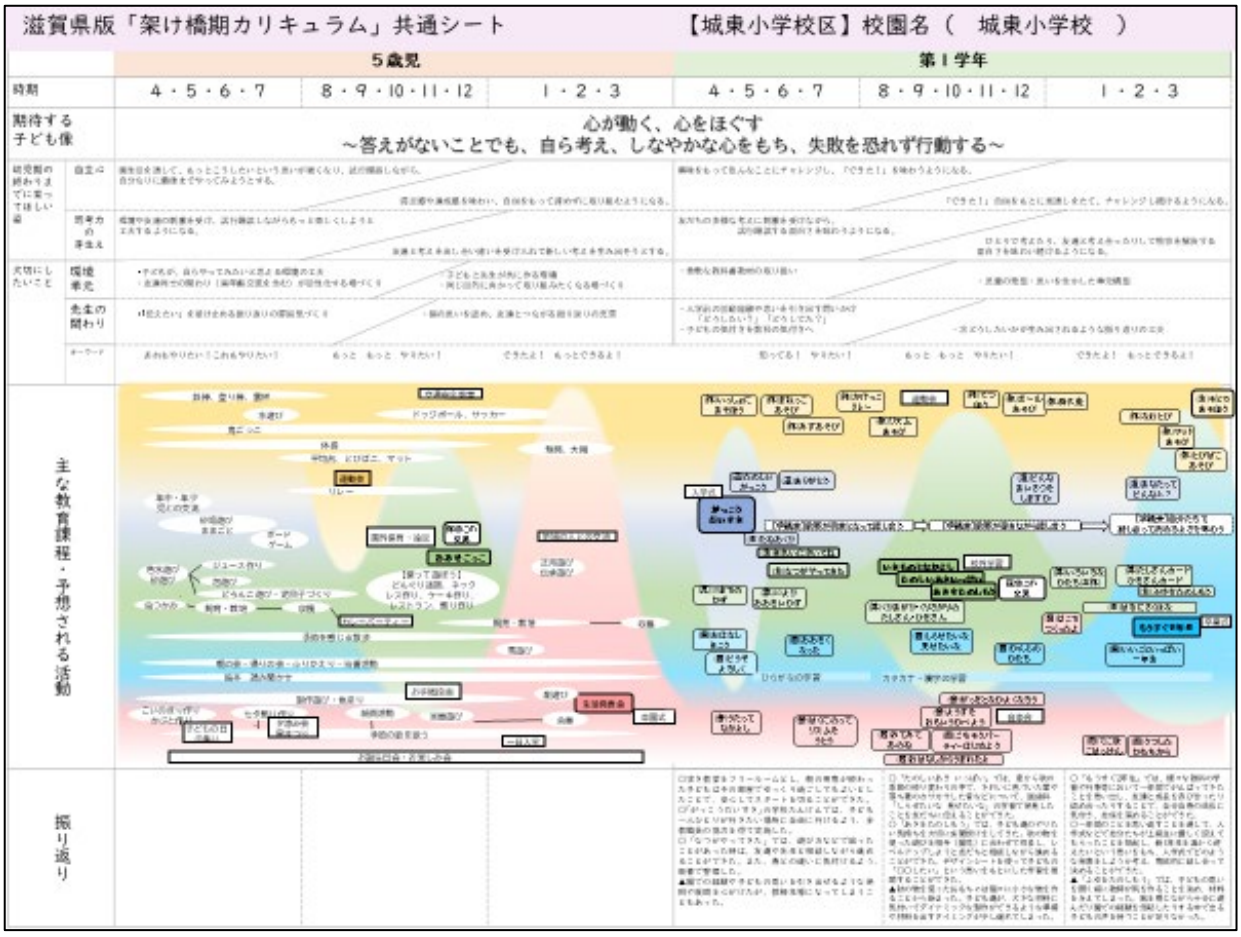
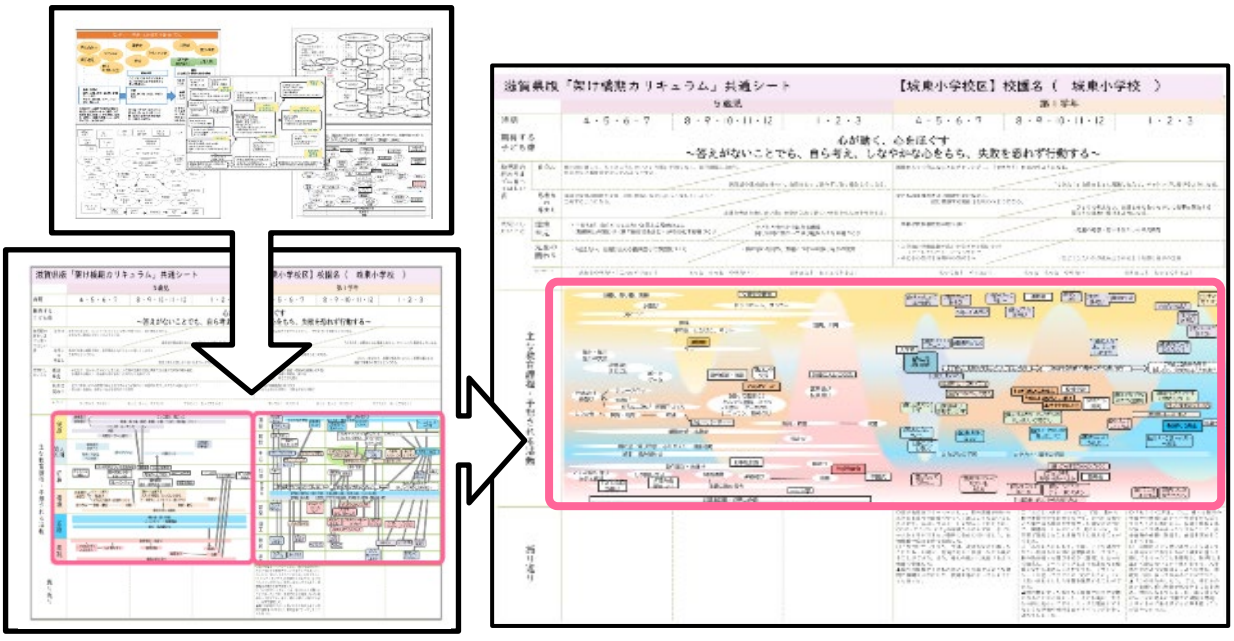


図 11　研究２年目更新の「架け橋期のカリキュラム（共通シート）」



４－２．架け橋期のカリキュラムの概要

本県では、各幼児教育施設で「アプローチカリキュラム」を、各小学校で「スタートカリキュラム」を作成しているものの、５歳児後半から小学校１年生４月～５月までの、児童が“学校に慣れる“ことを目指したもので、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえたカリキュラムになっていなかった。書いてあることが細かすぎる、用語がわからない、園と小学校が別個で作成し、互いのカリキュラムは見るだけであるといった、カリキュラムの枠組についての課題があった。

これらの課題を解決していくために、令和４年度に滋賀県版「架け橋期カリキュラム枠」を開発した。こちらの特徴は、園と小学校が協働で作成する「共通シート」と「実践記録」の２枚のシートで構成されている点にある。（図 12）

図 12　滋賀県版「架け橋期カリキュラム枠」

「共通シート」には、大きく三つの視点を設けた。視点は、①期待する子供像、②期待する子供像に関連がある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、③期待する子供像に迫るために大切にしたいことである。また、実践を振り返るための「振り返り枠」を設けた。

「実践記録」には、他園や小学校からのコメントを記載する「コメント枠」や「振り返り枠」を設けており、実践を振り返ったり、カリキュラムを改善したりするＡＡＲサイクルを生み出すことを意図した。ＡＡＲサイクルとは、（Anticipation：見通しをもつ、Action：やってみる、Reflection、Reconstruction：実践の振り返りを踏まえたデザインの見直し・再構成）のことである。

園と小学校が共通の視点を理解した上で、互いに実践し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が見られた子供の学びの姿を「実践記録」に描き出す。本県では、一度作って終わりではなく、柔軟によりよいものにしていこうとする姿勢を大切にしている。

４－３．架け橋期のカリキュラムの実践

令和４年度に、共通シートを作成し、実践記録で子供の姿を実施地域の園校で共有した。

令和５年度には、滋賀県版「架け橋期のカリキュラム」の「実践記録」をもとに、子供を主体とした保育・授業実践を更に推進することを目的として、「滋賀県版学びのサイクルデザインシート(通称：ぐるぐるシート)」を開発した。（図 13）

図 13　滋賀県版学びのサイクルデザインシート（通称：ぐるぐるシート）

本シートは、中心部に子供の姿を示し、その周りに環境構成や保育者・教師の援助、配慮すべきことなどを記入し、実践の可視化を図るものである。

シート作成の過程を残すことで、実践記録がより充実し、次年度への引継ぎを円滑に行うことができるようになった。実施地区を中心に実践記録として残すだけでなく、保育や授業の構想を考えるときのデザインやスケッチとして、途中まで書き込んで見直す時のツールとして、柔軟に活用している。（図 14）

図 14　滋賀県版学びのサイクルデザインシートの活用について

５．自治体の支援

５－１．研修の実施

＜実施した研修の概要＞

令和４年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
10 月 27 日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （瀬田北小学校・瀬田北幼稚園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11 月 17 日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （三雲小学校・平松こども園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11 月 25 日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （南比都佐小学校・南比都佐幼稚園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11 月 28 日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （守山小学校・守山幼稚園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
１月 24 日	幼保小の架け橋プログラム事業公開研修会 （城東小学校・彦根幼稚園・東保育園・聖ヨゼフこども園・るんびに一保育園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等

令和５年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
10 月 31 日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （雲井保育園・雲井小学校）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等

11月９日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （南比都佐小学校・南比都佐幼稚園・こばと園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11月13日	幼保小の架け橋プログラム事業公開研修会 （城東小学校・彦根幼稚園・東保育園・聖ヨゼフこども園・るんびに一保育園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11月16日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （金田幼稚園・ありす保育園・金田東保育園・金田小学校）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
１月21日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （守山小学校・守山幼稚園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等

令和６年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
５月28日	幼保小の架け橋プログラム事業公開研修会 （城東小学校・彦根幼稚園・東保育園・聖ヨゼフこども園・るんびに一保育園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・ポスターセッション ・指導助言 ・講演　等
８月22日	小学校生活科・幼児教育に関する教育課程および教育課題研究協議会 （北部対象）	対面	幼児教育施設保育者、小学校教、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	（前半）幼児教育施設分科会 ※小学校生活科は別分科会 ・協議主題についての説明 ・幼児教育施設からの提案 ・グループ協議 （後半）幼児教育施設と小学校生活科との合同協議会 ・幼児教育施設・小学校から幼保小接続の実践発表 ・グループ協議 ・講演
８月23日	小学校生活科・幼児教育に関する教育課程および教育課題研究協議会	対面	幼児教育施設保育者、小学校教、市町教育委員会担当者、市	（前半）幼児教育施設分科会 ※小学校生活科は別分科会 ・協議主題についての説明 ・幼児教育施設からの提案

	（南部対象）		町幼児課担当者等	・グループ協議 （後半）幼児教育施設と小学校生活科との合同協議会 ・幼児教育施設・小学校から幼保小接続の実践発表 ・グループ協議 ・講演
10月11日	第２回園長等運営管理協議会　兼　幼保小接続管理職研修会	対面	幼児教育施設長、小学校長、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・「幼保小の架け橋プログラム事業」モデル校区の校園長によるシンポジウム ・グループ協議 ・総括
10月30日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （雲井保育園・雲井小学校）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11月８日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （金田幼稚園・ありす保育園・金田東保育園・金田小学校）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11月15日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （新旭南小学校聖・静里なのはな園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等
11月21日	幼保小の架け橋プログラム事業公開研修会 （城東小学校・彦根幼稚園・東保育園・聖ヨゼフこども園・るんびに一保育園）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・ポスターセッション ・指導助言 ・講演　等
11月27日	学びに向かう力推進事業公開研修会 （秦荘幼稚園・秦荘東小学校）	対面	幼児教育施設保育者、小中学校教師、市町教育委員会担当者、市町幼児課担当者等	・公開保育、公開授業 ・参加者による協議 ・指導助言 ・講演　等

＜研修の成果と課題＞

令和４年度および令和５年度は、県独自の幼保小接続事業である「学びに向かう力推進事業」および本事業である「幼保小の架け橋プログラム事業」実施の５地域で、公開研修会を開催した。様々な規模の園校や施設類型の異なる幼児教育施設との幼保小接続の具体的な取組について、参加者に公開することができた。参加した幼児教育施設の保育士からは、「就学前の手法を取り入れて、授業されている様子に感銘を受けた。それぞれのよさを生かした接続の在り方を学ぶことができた。」、小学校の教師からは、「1 年生はゼロからのスタートではなく、園で体験を通して学んできている。幼児教育を小学校教育につなぎ、子供たちの成長を支えることが大切だと感じた。学びの過程を大切に、子供たちと共に成長していきたい。」等の感想があった。

令和６年度には、「架け橋プログラム事業公開研修会」を、年度初めと秋の２回に分けて公開した。５月には、５歳児から１年生への接続や４歳児から５歳児の接続期の様子を公開し、11 月には、３年間の取組のまとめとして、各園校によるポスターセッションを活用した報告の場を設けた。２回の公開研修会では、のべ 350 名の参加があり、参加者の関心の高さが伺えた。（図 15）

図 15　「架け橋プログラム事業公開研修会」の様子

また、令和６年度からは、既存の「幼児教育教育課程および教育課題研究協議会」を生活科の教育課程研究協議会と合同開催し、日々子供たちと接する保育者と教師の協議を実施し、互いの保育・教育に対する理解を深めた。

８月 22 日 23 日に開催した「令和６年度小学校生活科・幼児教育に関する教育課程および教育課題研究協議会」では、２日間で延べ 273 名の保育者・教師の参加があった。幼児教育の保育者からは、「互いに幼小連携について考えていることや感じていることを具体的に話し合うことができてよかった。また、違う市町の先生方と話す機会となり、視野を広げることができた。」、小学校の教師からは「幼児教育と生活科の接続が、いかに大切かを改めて感じることができた。また、保幼の先生方と実際に話す機会がもてたことは、今後の子供たちを育てていくにあたり、大きな視点の転換となったような気がする。」といった声があった。
（図 16、17）

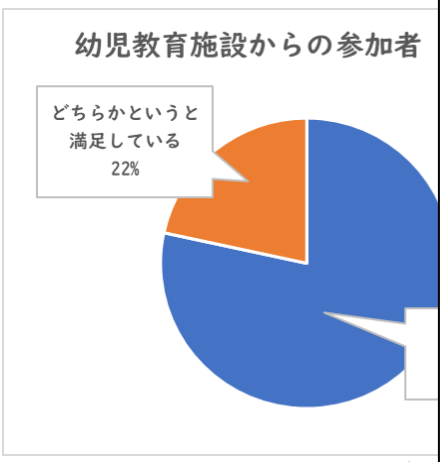


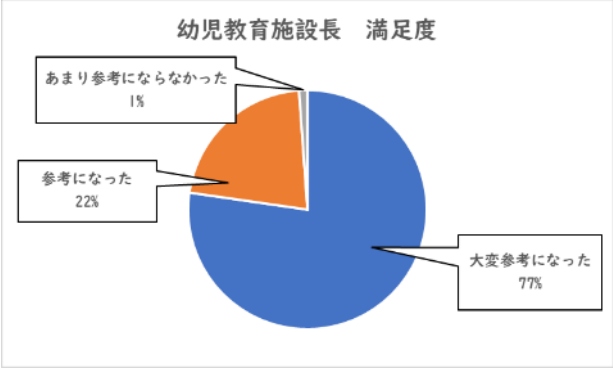
図 16　「令和６年度小学校生活科・幼児教育に関する教育課程および教育課題研究協議会」の様子

あわせて、令和６年度からは、既存の幼児教育施設長対象の「第２回園長等運営管理協議会」を拡大し、小学校管理職も参加できる「幼保小接続管理職研修」として、開催した。

これまで、幼児教育施設長と小学校長が一堂に会する研修会等がなかったため、今回の開催により、管理職の立場で自園校や市町で今後していきたいことや実現可能な取組等について協議し、管理職間の関係性を深めることができた。また、架け橋プログラム事業実施地域校区の管理職によるシンポジウムを行ったことで、取組の成果だけではなく、取組の過程であった葛藤や試行錯誤などについて伝えることができ、今後取組を進める園校にとって、大変参考になった。（図 18、19）

図 17　「令和６年度小学校

図 18　「令和６年度幼保小管理職研修」の様子



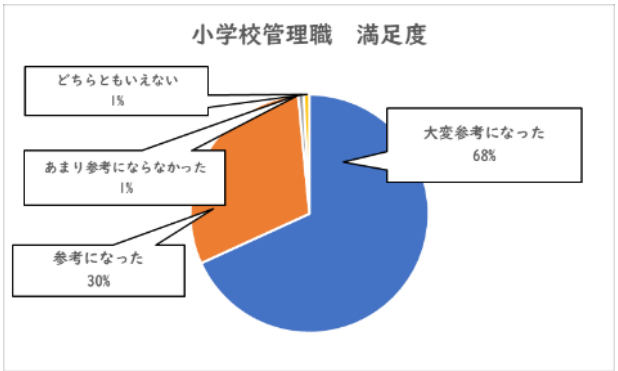


図 19　「幼保小接続管理職研修」（兼「第２回園長等運営管理協議会」の参加者満足度

５－２．教材等の作成

＜作成した教材等の概要＞

【令和４年度作成「学びをつなぐ幼保小架け橋ガイドブック『架け橋期のカリキュラムを作成しよう！』】
　滋賀県版「架け橋期のカリキュラム」や研究の成果等を全県的に普及するため、ガイドブックを作成した。
　ガイドブックでは、幼保小接続が形骸化することなく、持続的・発展的なしくみとなるよう具体的なモデルを示した。幼保小接続においては、「架け橋期のカリキュラム」を作成することがゴールではなく、幼児教育施設と小学校が、子供を中心に捉え、語ることを通して、保育・授業の質を向上させ、子供の育ちをつないでいくことが大切であることを啓発した。
（図 20）

図 20　「学びをつなぐ幼保小架け橋ガイドブック
　　『架け橋期のカリキュラムを作成しよう！』

【令和５年度作成　「学びをつなぐ幼保小架け橋実践事例 DVD―架け橋期のカリキュラムをもとに実践しよう―」】
　幼保小接続の取組を通して、教師の意識が変容し、そのことが保育・授業へつながり、５歳

児から小学校第１学年の子供の学びの姿が変容したことについて、県内の小学校および幼児教育施設へ発信することで、施設類型の違いを越えた幼保小接続を推進につながるよう、実践事例ＤＶＤを制作した。

公私立および施設類型の違いを踏まえ、子供が、育まれた力を発揮しながら学習や活動をしていることがわかる動画を作成した。動画の中で、管理職、保育者や教師のコメント等（幼保小接続を通して、組織が変わる。担任として意識が変わり、保育・授業が変わる。保育・授業が変わると子供の姿が変わる等）を適宜入れることで、視聴者が幼保小接続の大切さや、保育・授業改善のポイントを捉えられるようにした。

また、どのような力が育まれつつあるのか見いだせるような映像・画像にし、その姿を通して、視聴者自身が保育・教育でどのような工夫ができるのか考えられるようにした。

小学校においては、教科の資質・能力を育むために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた、主体的・対話的で深い学びの授業改善の手掛かりとなるものにした。

（図 21）

図 21　「学びをつなぐ幼保小架け橋実践事例 DVD―架け橋期のカリキュラムをもとに実践しようー」

【令和６年度作成　「小学校へつなぐ　幼児教育とつながる　学びの架け橋　保護者向けリーフレット」】

本県では、施設類型を問わず、幼児教育や幼保小接続の充実を一体的に進めるため、令和５年度末に「滋賀県幼児教育振興基本方針」を策定した。方針の中には、子供に関わる全ての大人が、愛情をもって関わり、子供と共に育っていくことができる体制づくりを構築することの意義を明記した。

また、全ての子供が、心安らぐ安定した生活環境で、希望や夢への期待をもって生活できる「ウェルビーイング」を高める観点から、0 歳からのつながりを意識して幼児教育に取り組み、“みんなで”“一体的に”　架け橋プログラム事業を展開することを目的として、保護者向けリーフレットを作成した。本リーフレットには、幼保小接続の取組や、幼児教育施設や小学校で大切にされていること、具体的な場面における幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿）の紹介、架け橋期に家庭で大切にしていただきたいこと等を掲載した。また、県内在住の外国籍家庭に配慮し、ポルトガル語、ベトナム語、韓国語、中国語（簡体字）に翻訳したリーフレットも作成し、外国籍保護者の要望に応じて対応できるようにした。（図 22）

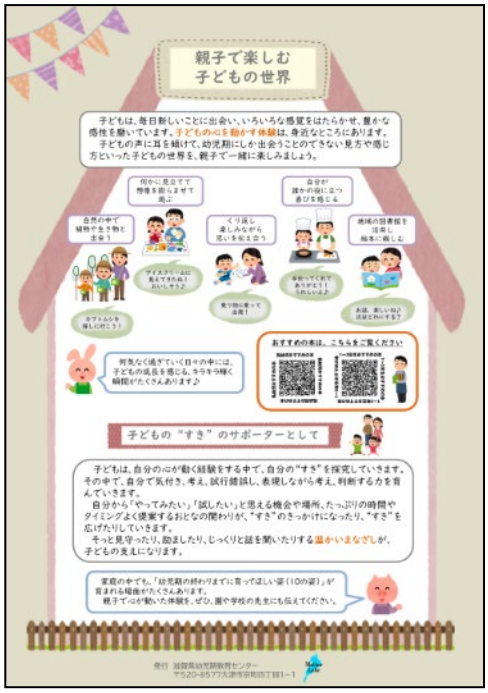


図 22　「小学校へつなぐ　幼児教育とつながる　学びの架け橋　保護者向けリーフレット」

ガイドブックと DVD は、県内の全ての幼児教育施設と小学校に配布し、保護者向けリーフレットは、３～５歳児の保護者に配布した。また、ガイドブックと保護者向けリーフレットは、PDF データを県のホームページに掲載した。各種研修会で、教材を紹介し、積極的な活用を促した。

＜教材等の成果と課題＞

【令和４年度作成「学びをつなぐ幼保小架け橋ガイドブック」について】
　ガイドブックは、これから「架け橋期のカリキュラム」を作成していこうとする園校の指針になったと考えている。
　本冊子には、幼保小接続の考え方や、子供の発達の過程に応じたカリキュラム作成の手順と重要なポイントについて分かりやすく示しており、自園校の現在の段階を確認したり、今後の展望を見通したりすることができる。幼保小接続の研修会や、園と小学校の合同会議等に持参する保育者や教師も見られた。
　県内の幼児教育施設の保育者や小学校の教師からは、「何から始めてよいか分からず不安だったが、ガイドブックに手順が丁寧に書かれているので、カリキュラム作りを進める大きな手掛かりになった。」「幼児期の終わりに育ってほしい姿が、小学校教育にどのようにつながっているのか、具体的な事例をもとに理解を深めることができた。」等の声があった。

【令和５年度作成　「学びをつなぐ幼保小架け橋実践事例 DVD」について】
　架け橋期のカリキュラムを作成し、それをどのように生かして、どのように実践するのか、映像資料として届けることができた。
　実施地域の園校の実践を紹介し、場面ごとに保育者や教師がどのような工夫をし、どのような援助や環境構成がされたのかについて、解説を交えた映像にすることにより、分かりやすく伝えることができたと考えている。
　県内の幼保小接続の関する研修会や各園校内の研修等で積極的に活用されており、また、他府県から活用依頼があり、他府県の研修会でも活用された。
　県内の幼児教育施設の保育者や小学校の教師からは、「自分たちが日々していることが価値付けられて、日々の保育に自信がもてた。」「園で子供たちがしている遊びについて、様々な『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』が見られることが理解できた。これから公開保育を見る時の視点になる。」等の声があった。

【令和６年度作成　「保護者向けリーフレット」について】
　保護者が手に取った時に視覚的に情報が伝わりやすいように工夫し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の具体的な場面を 10 の姿別に紹介した。子供の声を吹き出しで示し、遊びを通して育まれている資質・能力について、短い言葉で一目見て印象に残るようにした。
　県内の市町幼児教育関係者からは、「幼児教育で大切にしていることや、幼児が遊びの中で様々な経験を重ねながら学んでいることを、保護者に啓発するときに役立つ資料でありがたい。」「コンパクトにまとめられて、保護者に安心してもらえる内容だ。パッと見て様子がわかり、楽しそうな様子が伝わる写真から、何をしているのか興味をもって見ていただけるのでよい。」、保護者からは、「架け橋期に家庭で大切にしたいことが掲載されていて、納得できた。毎日、子供と共に過ごす日々がかけがえのない時間であることに改めて気づかされた。おすすめの本も紹介してもらえたので、今後の参考にしたい。」等の声があった。

５－３．その他の支援

＜その他の支援の概要＞

【県幼児教育アドバイザー訪問支援事業】
　県内各幼児教育施設や小学校、市町幼児教育主管課、市町教育委員会の要請を受け、県幼児教育アドバイザーが幼児教育施設や小学校等を訪問し、参観等を通して助言や支援等を行い、幼保小接続の推進や保育・教育内容の質の向上を図った。
　また、各市町幼児教育主管課および市町教育委員会が主催する研修会等において、幼保小接続や保育・教育の質の向上について、助言や支援等を行った。

　Ｍ市の５歳児部会においては、「円滑な幼保小接続について」というテーマのもと、実践の可視化や共有について協議し、実践を持ち寄って「滋賀県版学びのサイクルデザインシート（通称：ぐるぐるシート）」にまとめるワークショップを実施した。（図 23）
　参加者からは、「可視化することで自分の保育を見直すことができた。」「このシートに書き込むことでクラスの職員間での援助、方向性も共有できた。」「保育を可視化することは自分の保育の振り返りや他の先生との共有の面でも理解を深められると感じた。」「事例を書こうと思うと力が入るがぐるぐるシートの方が気軽に取り組めるように感じた。」等の感想があり、シートを協働で作成し、子供の姿について語り合ったことで、シートのよさを実感できる機会となった。

図 23　Ｍ市の５歳児部会

　０市では、Ｍ小学校とＭこども園が合同研修会を実施した。実施地域の実践をもとに、自園校版の架け橋期のカリキュラム開発を行った。（図 24）
　参加者からは、「架け橋期のカリキュラムの見直しの際に、修正アイデアを即座に提供いただいたことで、より目の前の子供にあった実効性の高いカリキュラムにすることができた。」、「これまで、“言葉による伝え合い”が大切だと感じつつも、具体的なイメージが曖昧だったので、“言葉のやり取り”を楽しむというイメージから出発して、子供との関わりを見直したい。また、伝えることで『楽しかった！』『もっと伝えたい！』と子供が思えるように工夫していきたい。」等の感想があり、充実した研修会となった。

図 24　０市Ｍこども園・Ｍ小学校全体研究会

６．本事業に取り組んだことによる成果

６－１．自治体における成果

＜自治体における成果＞

実施地域での架け橋期のカリキュラム開発や改善、公開研修会等の実践を中心に、県内に広く発信できた。実施地域における具体的な取組事例が、他の地域の手本となり、県内の取組を促進させた。

県内では、実施地域の実践をもとに、市町が主体となって幼保小接続を推進する取組が広がったことも大きな成果である。

成果物である「幼保小架け橋ガイドブック」をもとに架け橋期のカリキュラムを作成し、「学びをつなぐ幼保小架け橋実践事例 DVD」で実際の保育・授業の様子、幼保小接続で大切にしたい視点を理解して、「まず、やってみる」という各園校のそれぞれの一歩を支援することができた。

また、本県における幼児教育および幼保小接続の更なる充実を、施設類型の違いを越えて一体的に推進するため、「滋賀県幼児教育振興基本方針」を策定した。本方針に基づいた保育・教育が各幼児教育施設や小学校で推進されるよう、その拠点として、令和６年４月に滋賀県幼児期教育センターを開設した。

滋賀県幼児教育振興基本方針では、滋賀県の幼児教育における目指す子供の姿を「心を動かし、自ら考え、夢中になって遊び込む子供～子供をまんなかに、生きる力のねっこを育む～」とし、“みんなで”“一体的に”を合言葉に、子供に関わる全ての大人が愛情をもって幼児教育に取り組む姿勢を大切にしている。「保護者向けリーフレット」による啓発により、幼保小接続の取組を、幼児教育・小学校教育に関わる保育者・教師だけでなく、家庭・地域も含めて一体的に推進する姿勢を示すことができた。

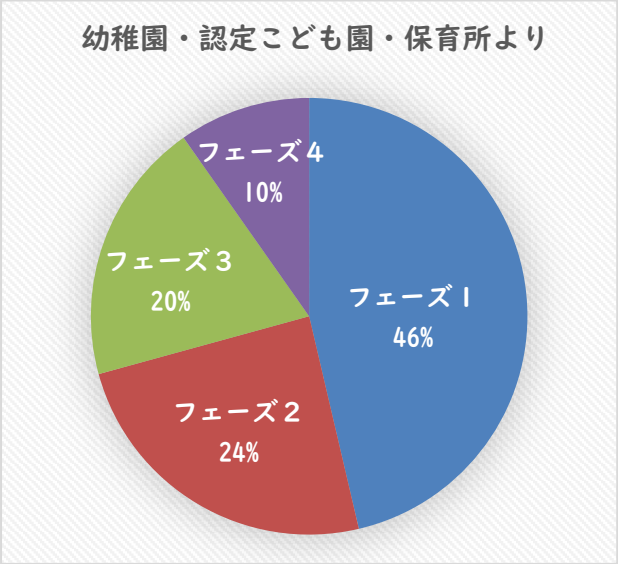
＜定量的・定性的な調査結果＞

令和５年度と令和６年度に、幼児教育施設と小学校における幼保小接続のカリキュラム作成状況について、現在のフェーズを確認した結果が、以下のとおりである。

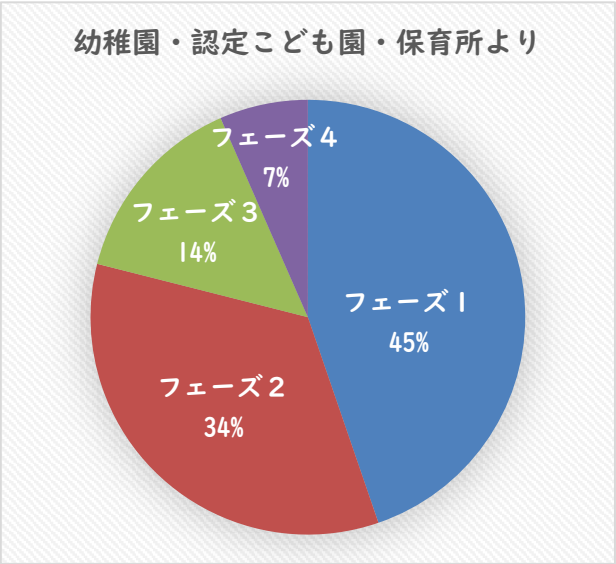
なお、幼児教育施設については、第２回園長等運営管理協議会の参加者に、小学校については、県内の公立小学校および義務教育学校においてアンケートを実施した。

〈園・小学校での体制についてのアンケート結果〉

【令和５年度】



【令和６年度】



フェーズ１：各園・小学校に連携の窓口がある。

フェーズ２：幼保小の合同会議を設置し、互いの教育の内容や方法について共有している。

フェーズ３：幼保小の合同会議では、互いの教育の内容や方法について理解を深めている。

フェーズ４：互いの教育の内容や方法について理解したことをもとに、保育・授業の改善・発展に努めている。

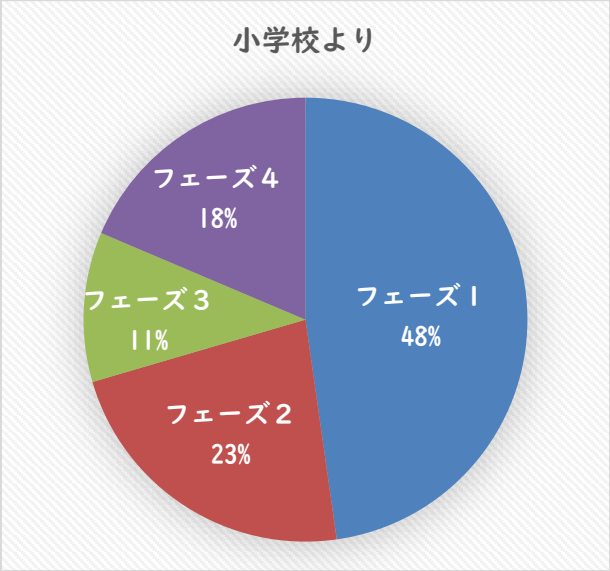
県内の幼児教育施設では、連携窓口の設置率や合同会議の設置率（フェーズ１、２）は、前年より増加した。一方で、理解の深化や改善・発展への取組（フェーズ３、４）が減少していることから、幼保小接続の質や実効性に課題が残る。

合同会議が設置されても、実質的な教育内容や方法の共有・理解深化が十分に進んでいない可能性がある。幼児教育と小学校教育の相互理解や、幼保小接続の深化が減少していることは、連携活動の質的な停滞があり、再評価と改善が必要である。今後、以下の点を強化する。

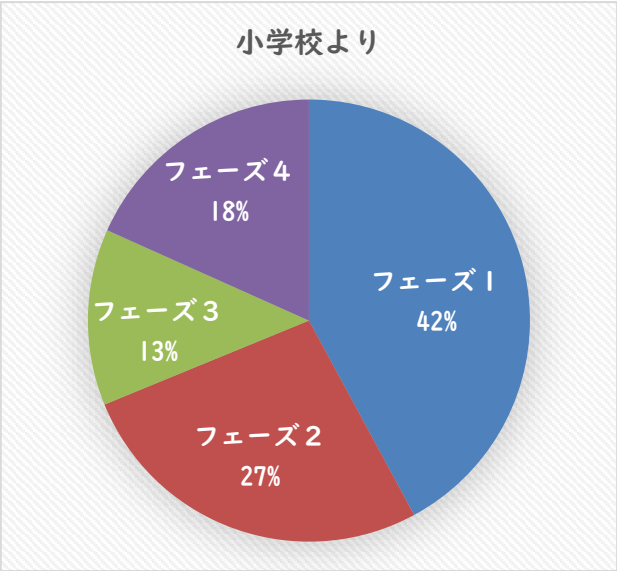
・専門職間の連携強化：定期的な合同研修や情報交換の場を充実させ、教育内容や方法の共有を促進する。
・カリキュラムの一貫性確保：幼児教育と小学校教育の接続を見据えた架け橋期カリキュラムの編成や保育・指導計画の策定を支援する。
・改善活動の推進：幼保小合同会議での議論を基に、具体的な保育・授業の改善策を立案・実施し、その効果を評価・共有する。

〈幼保小接続のカリキュラム作成状況についてのアンケート結果〉

【令和５年度】



【令和６年度】



フェーズ１：幼児教育と小学校教育の接続の観点から、教育課程編成・指導計画作成を行っている。
フェーズ２：園と合同で、「架け橋期のカリキュラム」を検討・開発している。
フェーズ３：園と検討・開発した「架け橋期のカリキュラム」を実施し、検証を行っている。
フェーズ４：作成した「架け橋期のカリキュラム」について、園と毎年見直しを行っている。

県内の各小学校では、全体的に、幼保小接続のカリキュラム作成に関する取組は進展しているものの、各フェーズでの実施率は依然として低い水準にある。

特に、教育課程の編成や指導計画の作成、カリキュラムの実施と検証、そして、毎年の見直しといった継続的な改善活動が十分に行われていないことが課題として浮かび上がる。この結果からは、これまで各園校が別個で作成していたアプローチカリキュラムおよびスタートカリキュラムでは不十分であるという認識が広がり、園校が協働して架け橋期のカリキュラムの作成を進めている現状が伺える。今後、幼保小接続のカリキュラム作成状況を改善し、子供たちの学びの円滑な接続を支援するため、以下の点を強化する。

- 幼保小間の連携強化：園と小学校の保育者・教師が定期的に交流し、教育内容や方法の共有を促進する研修や会議を充実させる。
- カリキュラム開発の支援：「架け橋期のカリキュラム」の検討・開発をサポートするためのガイドラインや教材等の提供、幼児教育アドバイザー（架け橋期コーディネーター）の派遣等を行い、協働作業を促進する。
- 実施状況の評価と改善：カリキュラムの実施状況を定期的に評価し、必要な改善策を講じるためのフィードバックシステムを構築する。
- 持続的な見直しプロセスの確立：カリキュラムの効果を最大化するため、各園校が毎年の見直しを計画的に実施し、最新の保育・教育ニーズに対応できるように支援する。

６－２．園・校における成果

＜先生方の指導と子供の姿の変容＞

実施地域では、様々な変容が見られるようになった。

【保育者・教師の意識の変容】
　小学校の教師は、園での環境構成や援助を知って、子供の姿を中心に考えるようになり、保育者は保育の素晴らしさを再認識し、より生き生きした保育を実践するようになった。それが、子供たちのもつ力を信じて、待つ姿勢を大切にするようになったことや、「園ではどうしていた？」「どうしたらいいと思う？」等、子供の経験や思いを引き出す援助・支援を意識するようになったことにつながった。

【保育・授業の変容】
　保育・授業を相互参観する中で、他の園校の取組を積極的に取り入れるようになった。
　また、ぐるぐるシートを活用することで、保育・授業改善が促進された。シートを使っていただいた先生方から、「子供の思いや育ちが可視化されたことで、次の活動への見通しが持ちやすくなった。」「当日までの遊びの経過や、子供の思いやイメージの変化などが伝わりやすく、参観する際にも分かりやすい。実践記録として残していくことで、大きな財産になる。」などの声があった。

【園・小学校の変容】
　保育者や教師の変容が見られたことで、実践が広がり、５歳児と１年生だけの取組ではなく、各園校が学びの連続性を意識して、組織が一体となって、共に環境を構成したり、保育・指導について相談し合ったりするようになった。そして、園校の保育者・教師が、気軽に行き来し合ったり、保育や授業を語り合ったりできる風通しのよい関係性ができた。

【子供の姿の変容】
　そして、それらの変容が子供の姿の変容につながり、子供が自分の決めたことをやり遂げようと、粘り強く活動に取り組むようになったことや、保育者や教師、周囲の友達に自分の思いを進んで伝えたりしながら、生き生きと活動する様子が、様々な場面で見られるようになったことなどを先生方が実感している。
　保育者や教師が、子供の具体的な姿（場面・表情・つぶやきなど）を見取り、変化や成長に気付き、積極的に情報共有しようとする園・小学校の風土が醸成された。保育者・教師の学びのサイクルが繰り返され、高まる中で、保育・授業改善が促進され、子供の姿の変容につながった。

＜保護者の反応＞

【幼児教育施設より】
　園内に研究方法や保育ドキュメンテーション、園内研究会の写真や協議シート等を掲示したことで、保護者から「園で取り組んでいることがよく分かった。」、「様々な方が園を出入りすることにより、子供達も様々な方と交流を持てたことは、とてもよい経験になった。子供の遊ぶ意欲が育ってきた。」と高い評価を受けた。幼児期の遊びが学びであることへの理解が深まり、園の保育に対する期待が高まっている。
　また、「子供達の成長はもちろん、先生方の成長を頼もしく感じる。」「研究を進める中で様々な皆で力を合わせて全力で取組む姿が印象的であった。」と、事業に対する保護者や地域の方からの肯定的な評価があった。

A 園では、園の保護者評価の項目「子供の興味関心に合わせた環境に力を入れて指導しています。お子さんの遊ぶ意欲は育ってきたと思いますか」に対して、５歳児保護者の「あてはまる」が、R４年度 78%→R５年度 66.7%→R６年度 96%と推移してきた。令和６年度に関しては、３歳児 75%、４歳児 76%と数値が高く、３年間の取組の成果が大きいことが伺える。

【小学校より】

幼児期の経験を生かした環境構成を工夫したことで、保護者からは、「１年生の教室横のフリールームが、園と同じ雰囲気に配置、活用してくださっているので有難い。」（図25）、「行きしぶりを心配していたが、嫌がることもなく、園の延長の感じで登校できているので嬉しい。」との声があった。令和６年度末の学習参観後に、以下のような保護者からの感想があり、学校全体に取組の効果が浸透している。

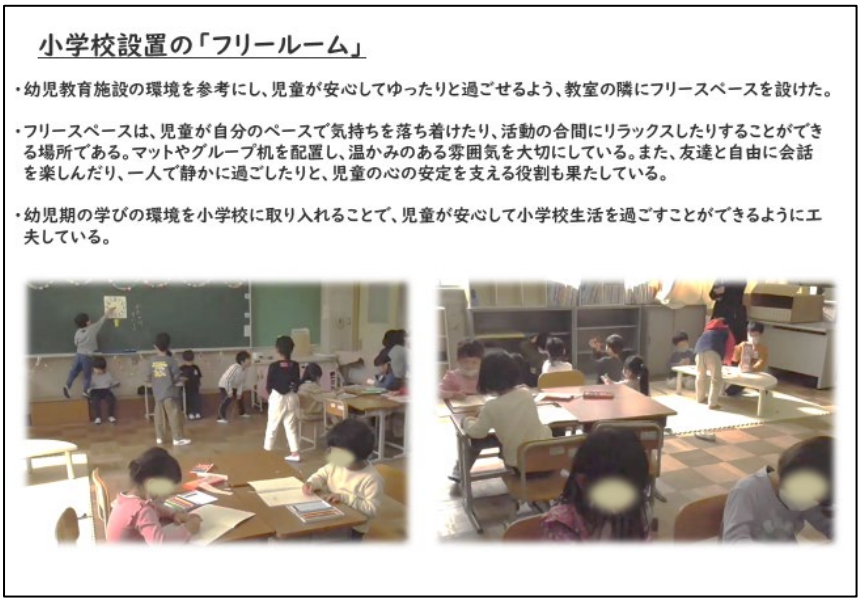


図 25　小学校設置の「フリールーム」

〈１年〉生活科（１年間のまとめの学習発表）
- 子供の自主性を重んじ考えさせる授業、２年生に向けて大きな成長も見られ素晴らしかった。
- 子供達が主体となって発表や歌を段取りよく進めることができていた。
- 自分たちで考えて取り組んだ様子が見られて、１年間の成長を感じることができる参観であった。自分たちなりにどうすればよくなるのか考えることができていた。

〈２年〉生活科（町たんけんのまとめの学習発表）
- どのグループもはきはき発表できていた。友達と相談しながら、考えを出し合っているところに成長を感じた。

〈３年〉総合的な学習（自分たちの地域の商店街について　ポスターセッションの学習発表）
- 自分たちで調べた素敵がいっぱいの町のことをたくさんの人に知ってもらいたいという気持ちが伝わってきた。
- 自分たちが調べたことをまとめて文章にして、人に伝えるという学びができていて驚いた。とても高度なことで、子供達の頑張りが頼もしかった。

〈４年〉総合的な学習（福祉についての学習発表）
- 子供達が「やらされている」感じではなく「自分たちで作り上げている」感じがするのがとてもよかった。

〈５年〉総合的な学習（琵琶湖学習　まとめの発表）
- 琵琶湖について楽しく伝えたい、琵琶湖のために自分たちができることをやっていきたいという気持ちが各グループから伝わってきた。PowerPoint も見やすいように工夫されていた。
- 「びわフェス」一つ一つのブースを手作りで工夫されていて、とても見応えがあった。

〈６年〉保護者への感謝の集い
- 一人ひとりのスピーチがとても上手にできていた。英語劇も全部自分達で考えたと聞いて完成度に驚いた。
- 一人ひとりが自分の思いを自分の言葉で伝えようとしている姿が印象的であった。

７．今後の課題と展望

３年間の本事業の取組事例や成果を広く発信し、県内の幼保小接続の推進を図った。

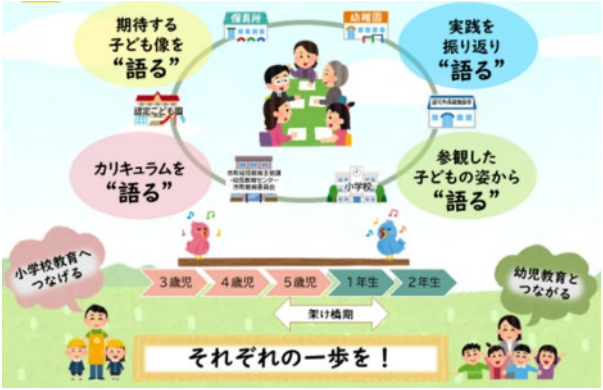
しかし、市町によって幼保小の架け橋プログラムに対する取組状況には、未だばらつきが見られる。実施地域のある市町では積極的な取組が行われて、近隣の地域に水平展開されている一方で、十分な進展が見られない地域もある。県内の市町・校区・地域の現状や各園校の思いは様々で、その地域に即した取組が求められる。

また、幼児教育施設では、５歳児だけ、小学校では１年生だけの取組になってしまっている地域がある。そして、幼児教育施設と小学校が合同で集まる機会を設定することが、幼児教育施設と小学校の時間の調整や、日々の多忙な業務のために難しい場合がある。このような状況では、関係者が意見を交換し、協力関係を築く機会が十分に確保できず、取組の効果が薄れてしまうことが考えられる。

以上の課題に対処するため、校区内の風通しのよい関係性をつくることや、各園校の公開保育・授業研究会等へ相互参加すること、既存の定期的な協議会にカリキュラム開発会議の内容を含めて実施するなど、「気軽に・気楽に・無理なく進められる取組」を推奨し、引き続き支援していこうと考えている。

また、県と市町、市町間の連携を強化し、市町幼児教育担当者協議会や「滋賀県幼児教育アドバイザー（架け橋期コーディネーター）訪問支援事業」を実施し、各市町、各園校の研修会での指導助言等により、具体的な取組事例の共有や情報交換を促進することや、架け橋期のカリキュラム作成・更新のための具体的なガイドラインを提供し、幼児教育施設と小学校等の合同研修会のためのスケジュール調整や運営を支援し、県全体での取組の進展を図ることができるよう取り組む予定である。

８．まとめ



本事業と通して、「語る」大切さを実感した。「期待する子供像を語る」、「カリキュラムを語る」、「実践を振り返り語る」、「参観した子供の姿から語る」の４つの「語る」を今後も大切にしたい。

幼保小の円滑な接続を実現するためには、子供の発達の連続性を考慮した保育・教育の在り方を確立し、関係者が“協働”する仕組みを構築するためには、以下の３点が不可欠だと考える。

【幼児教育と小学校教育の連続性を意識したカリキュラムの整備】

幼児教育施設と小学校が協働し、「学びの接続」を意識したカリキュラムを作成することが求められる。幼児期の「遊びを通した学び」と、小学校の「教科を中心とした学び」の間にギャップが生じないよう、両者の特性を生かした教育課程を策定することが重要である。

【幼児教育施設と小学校の教員の協働と専門性向上】

保育者と小学校の保育者・教師が互いの保育・教育や実践を理解し合うために、管理職のリーダーシップのもと、合同研修や相互参観を定期的に実施することが必要である。また、小学校の教師が幼児教育の特性を学ぶ機会を増やすとともに、幼児教育施設の保育者が小学校の学びを理解することで、架け橋期の子供たちへの援助・支援や環境設定がより適切に行えるようになる。

【保護者や地域と連携した支援の充実】

保護者に対しても、幼児教育から小学校への移行についての理解を深めるための説明会やワークショップ等の啓発を行うことが望ましい。また、地域の関係機関と連携し、子供の発達や学びを多角的に支える環境を整えることが重要である。

最後に、幼保小の接続を更に推進するためには、国や自治体が積極的に関与し、制度的・財政的な支援を行うことが必要である。

国から、幼保小接続促進するためのフェーズが示されたことで、取組の現状把握や今後の展望を具体的に捉えることができた。また、保育・教育の質の向上と幼保小接続の効果を高めるために、財政的な支援があることでできる取組がある。例えば、幼保小接続推進のための専門人材配置支援や運営費補助、ICT を活用した園校の情報共有を推進するための設備投資支援、幼保小接続状況の評価・改善のための調査研究費等が考えられる。

本県では、本事業費を活用し、他の都道府県の視察等から得た知見をもとに成果物を作成したり、県として「滋賀県幼児期教育センター」を設置したりすることができた。今後も幼保小接続に関する研究・実践事例の収集と全国への普及を期待したい。

県として、幼児教育施設と小学校が協働しやすい環境づくりを進めることが必要であると考える。県内の市町・校区・地域の現状や各園校の思いに寄り添い、その地域、その園校なりの取組を進めることができるように、今後も伴走しながら幼保小接続の推進を図りたい。